

あんげろす

明治学院研究 1

坂口 緑

今年度、キリスト教研究所が提供する授業のひとつ「明治学院研究 1」を担当している。専門家によるリレー講座を、興味深く聴講させてもらっている。授業を通して思い知ったのは、思想弾圧や植民地支配のなかで、キリスト教信仰を貫く困難さである。居留地に囲い込まれ辞書を作り聖書を訳したヘボンとその仲間たち。文部省訓令第十二号をめぐる折衝の矢面に立ちキリスト教主義教育を守った井深梶之助。三・一独立運動の独立宣言書を準備し、各地の運動を率いた朝鮮からの留学生。関東大震災のデマによる迫害を恐れて駆け込んできた留学生を迷わずかくまった宣教師。被災地に入った賀川豊彦とともに瓦礫の中でセツルメント活動を担った当時の学生たち。鮮やかによみがえるエピソードの数々から、先人たちの気概を間近に感じる機会となっている。

ただ自校史を扱う授業は、愛校心をくすぐる内容に終始する場合がある。実際「この大学で良かった」「誇りに思った」とのコメントを寄せる学生も少なくない。けれども、回を重ねるにつれ、その質が変化してきている。ヘボンのパートナー、クララが脇役なのはなぜか、と指摘する学生がいた。明治学院は筋を通す大学だったというが現在もそうだろうか、と問う学生もいた。若い人たちの心が揺さぶられていることがわかり、担当者としても感慨深い。このような良質の授業が、これからも形を変えながら継続されることを心から願っている。

さかぐち・みどり (所長)

第 94 号

2024 年 7 月



パリのなかの中世をさがして

高木麻紀子

2019年の晩夏、大学の夏季休業期間をつかってパリの街を訪ねた。実は、筆者が2年間の留学生生活をすごしたのはパリではなく、パリの東駅から特急列車で2時間の、フランス北東部に位置するアルザス地方である。東部を縦断するライン河を渡ればすぐにドイツで、緑深いシュヴァルトツヴァルトが広がり、一方、北部に聳えるジュラ山脈はスイスまで続いている。かつてはケルト人が住んでいたというこの土地はまさにヨーロッパの「十字路」で、様々な民族が行き来した末にようやくフランス領に落ち着いたのは第二次世界大戦終焉間近の1944年のことであった。

このアルザスの中心都市ストラスブールの大学院に入学し、どうにか諮問会を終えて帰国した直後は、これでしばらくアルザスはいいかな、などと思っていた。井の中の蛙ではないけれど、現地の洗礼はなかなか厳しく、気高く空へと伸びるストラスブール大聖堂の姿とともに立ち上がる記憶がなんとなく足を遠ざけさせた。結局、再訪を果たすまでに7年もかかってしまったが、その間も交通の面でも美術史研究の面でも拠点となるパリには、いつまでもどこかおのぼりさん気分であらねば年1回は滞在していたのである。このときの訪問の主な目的は、オペラ地区にほど近いリシュリュー通りにある美術史研究所の図書館で資料を収集すること。そのあとは地方都市をいくつかめぐり、最後はロンドンへたどり着かねばならないので、パリに割ける時間は決して多くはない。それでも調査とは別に訪ねたい場所があった。

2019年4月15日の夕方、パリのノートル・ダム大聖堂で火災が発生した。火は瞬く間に燃え広がり、古い木材を骨子とする身廊および翼廊を覆う屋根の大部分と、当時、修復作業中であった尖塔が崩落した。パリの中心を流れるセーヌ川の中州、シテ島に建つこの大規模な建造物は、パリ司教モーリス・ド・シュリーの指揮のもと1163年に着工されたゴシック建築の代表作である。14世紀にほぼ現在の

五廊式聖堂の姿が完成した以降、ほとんど廃墟同然となった不遇の時代もあったものの、1854年に修復作業が開始され、1991年には「パリのセーヌ河岸」の名称で周辺の文化遺産と共に世界遺産に登録された。いまでは誰もが知っているパリの人気観光スポットである。

「ノートル・ダム Notre-Dame」とは「わたしたちの貴婦人」という意で、つまり聖母マリアを指す。聖母に捧げられ、「ノートル・ダム」の名を冠したゴシックの教会堂は、筆者が留学生生活をおくったストラスブールを筆頭にフランス各地に存在する。だがやはりユゴーの小説の影響か、多くの人にとって「ノートル・ダム」とはパリのそれを指すようである。そんな著名な歴史的建造物の火災は、日本のメディアでも大きく取り上げられた。

まだまだ日本ではなじみの薄い西洋の「中世」という時代を、これほどまでにアクチュアルに感じさせる出来事がかつてあったのだろうか。実のところ、火災当時とりわけ話題にされていた焼け落ちた尖塔は19世紀に再建された箇所であり、中世の創建時のものではない。それでも、大聖堂が中世からの時間の流れやパリの歴史を、まるで地層のように鮮やかに可視化していることにはかわりない。ニュースを通して見る現地の人々の表情や言葉からは、失われたことによってかえってくっきりと、その存在の象徴性を増しているように感じられた。身近なところでも、火災翌週のある大学の講師室では、カトリックの学校ゆえか誰もがこの話題に触れていた。驚いたのは、みなそれぞれが大聖堂にまつわるエピソードをもっていることで、そのひとつひとつに興味深く耳を傾けた。一方の筆者はというと、火災のほんの数か月前にもパリにいたにもかかわらず、あいかわらず調査スケジュールをこなすのにいっばいいっばいで、その姿を視界の端に捉えつつ足早に通り過ぎてしまっていたのである。あの日、悲痛な面持ちで、あるいは興奮した様子でインタビューに答えていた生粋のパリっ子たちを前にして、ほんの一時しかパリに暮らしたことのない者が何かを述べることにはためらいもある。それでも、あらためて大聖堂の姿を見たい、と思ったのだ。

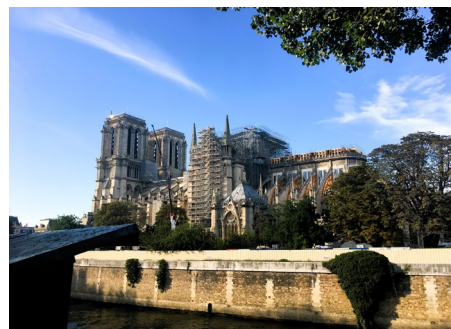
パリ滞在2日目、ちょうど同じ時期にやはり調査のためにやってきた友人と、夕方、地下鉄のhotel de ville 駅で待ち合わせをしてシテ島へ向かった。夏のパリは18時を過ぎててもまだまだ明るい。道に並ぶアイスクリーム屋さんのパラソルがいかにもバカンス中の長閑な雰囲気を醸し出していたが、大聖堂が近づいてくるとなんとなく緊張してきた。しかしその日、大聖堂の内部に入るのはもちろんのこと、接近することも叶わなかった。先の火災を機に屋根などに使われていた鉛が空気中に飛散してしまい、その汚染除去作業のため大聖堂の周囲の道路が封鎖されたのである。とりわけ周辺地域の子供たちへの健康被害を懸念しているようで、大聖堂全体がバリケードで覆われていた。それでも周囲をぐるっと歩いてみると、外壁のあちこちが黒く煤け、なんとも痛々しい。ノートル・ダムのフライグ・バットレスを、後陣の背後にあるジャン2世広場から眺めるのが、まるで絶滅した巨大恐竜をみているようで好きなのだが、その美しいアーチにも補強のための木材があてがわれていた。満身創痍の貴婦人を撮影してもよいものなのか。どこか申し訳ない気持ちになりながらその姿を写真に収め、いつか再建されたらまた訪ね、蝋燭を捧げようと、友人と約束した。

翌年の2020年は、もしかしたら秋に、遅くとも冬には、と思っているうちに、はじめてのオンライン授業の準備に追われ、時間はとぶように過ぎていった。そうしたなかで、あの日のノートル・ダム訪問をきっかけに芽生えた、あらためてパリのなかに残る中世の痕跡をさがして、自分の目で確かめておきたいという思いがふくらんでいった。長い中世の歴史のなかでも筆者が研究対象としてきた彩飾写本の多くが制作されたのが、ヴァロワ朝時代前半、つまり1328年から百年戦争終結の1453年頃までのパリある。度重なる戦、なによりペストの猛威にさらされたこの時代を、パンデミックを経験してしまいたいもう一度みつめなおしたら、今までみえていなかった何かに気づくことができるかもしれない。なんだか大げさになってしまったが、ふたたびパリの街を、お気に入りのお菓子屋さん立ち寄

りながら歩きたい、というのもまた本音である。そうしてようやく2023年9月、そして2024年3月にも少しだけ、パリの地に降り立つことができた。

今年の3月、大聖堂はなんとあの焼け落ちた高さ約96メートルの尖塔を取り戻した姿で立っていた。当初、この尖塔をどのようなデザインで再建するのかについては美術や建築関係者の間でかなり話題になっていた。先述の通り、そもそも2019年の火災で失われた尖塔はゴシック時代のものではなく、1845年に開始された大聖堂の修復事業の折に、責任者ヴィオレ＝ル＝デュックの設計に基づいて再建されたものであった。このときヴィオレ＝ル＝デュックは、残されたデッサンを通して知られる中世のデザインに、ややもすると過剰ともいえる変更を施しており、それが批判の対象にもなってきたのである。しかしフランスは、このヴィオレ＝ル＝デュックのデザインで再建することを選択した。それはつまり、いま生きているわたしたちの記憶のなかの貴婦人を蘇えらせるということである。

ちょうど2月のFrance 2のニュースでは、この尖塔の最上部の仕上げ作業に携わるロレーヌ地方の鉛職人が取り上げられていた。木組みの尖塔を鉛のプレートで覆い、雨風に耐えられるよう補強するそうだ。大聖堂のために地方の優秀な職人たちが一堂に集い、持ち得る技を尽くして仕事にあたるその様子は、書物を通じて想像していた中世の石工たちが現代にあらわれたようであった。ノートル・ダムは今年の12月に再びその扉を開く。フライグ・バットレスの下をもう一度ぐるぐるを楽しみにしながら、ひきつづきパリのなかの中世をさがしてゆきたい。



たかぎ・まきこ (所員)

キルケゴールの人間観とその時代

鹿住輝之

今年度、客員研究員としてお世話になります鹿住輝之です。この度、このような恵まれた環境で研究する機会をいただき、非常に感謝しております。さて今回は、自己紹介もかねまして私の研究対象のセーレン・キルケゴールの思想について少し紹介させていただこうと思います。

セーレン・キルケゴールは、19世紀のデンマークを生きた人です。キリスト教思想家として知られる彼ですが、サルトルやハイデガーといった実存思想への影響、神学方面ですと、カール・バルトやブルトマンなどに影響を与えた人として一般に知られています。日本では岩波文庫での『不安の概念』や『死に至る病』を通して、非常にポピュラーな思想家なので、お読みになられた方も多いのではないのでしょうか。

私がキルケゴールに興味を持ったきっかけは、『死に至る病』の中で扱われる絶望という概念でした。キルケゴールによれば、絶望は、動物には生じない感情で、人間が独自のものであるということです。初めて読んだ際には、この絶望という概念が非常に難解で、まったくわかりませんでした。研究するにつれ少しずつ理解できるようになりました。この絶望という言葉を通して、キルケゴールの人間観を垣間見ることができます。

さてこの絶望ですが、日本語の絶望という語感と少し異なっていて、デンマーク語の語源を見るとわかりやすくなります。絶望はデンマーク語で Fortvivelse という語ですが、これはデンマーク語の疑うという言葉である Tvivl に由来する言葉です。さらにこの Tvivl はドイツ語 Zweifel と同様に数字の二（デンマーク語で To、ドイツ語で Zwei）に由来する言葉です。少し語源を遡りましたが、この二ということが疑いと絶望の意味に大きくかわるのです。

疑うことが、何かと考えると、それは、人がある対象を認識する際に、その対象に対して考えたイメージと実際の対象との間に齟齬があった時に生じるものだと思います。これはヘーゲルが懐疑主義について言っていること

とも関係しているのですが、例えば人が、ある美術作品を鑑賞している場面を想像してみてください。そこでその人は、この美術作品が、真作であるか贋作であるか疑いを持っています。さてこの疑いがどこから来るかと言いますと、この鑑賞者が過去に見た真作や真作についての頭の中のイメージと実際にある作品の性質が異なることから生じます。こういった頭の中の正しい尺度と実際の対象の齟齬によって生じるのが疑いです。語源に数字の二に関わるのは、この正しい尺度、理想や概念とも置き換えられますが、そういった思考上の対象と現実にある存在との二つから生じるということです。

この疑いは、自分の外の対象に向かいますが、それが自分自身の存在に向かう時に絶望が起こります。つまり自分自身が、なんであるかという理想的な状態と現実の状態の齟齬から絶望が起こります。日本語においても絶望というのは、希望が絶たれることを意味しますが、それは自分自身が描いた理想的な状態と現実の状態との距離から生じるものなのではないのでしょうか。そしてこの絶望は、意識化されていなくてもほとんどの人間がそういった状態だとキルケゴールは言います。

例えば人は、社会生活の中で様々な役割を求められるかと思えます。理想的な学生、研究者、会社員など他にも多くの役割があります。しかし期待された役割を完璧にこなそうとしてもなかなか難しい。そして努力を続ければ続けるほど、その距離は無限に広がっていくかのように感じてしまいます。人間は、常に理想を抱くとともに、現実には肉体を持ち、感性的な欲求を持つ存在であるため、常にその間で揺れ動き、不安定であって、そういった意味で常に絶望しているとキルケゴールは言っているのだと思います。

さてこの絶望的な状態に対する解決として彼が提示するのが、受肉した神であるキリストです。キリストは、人の姿で生き、苦しみを受けた存在として、人間の弱さを肯定し、赦すものとして描かれています。この不安定な人間の存在を肯定する世界観を与えるのが、彼にとってキリスト教だったのだと思います。

こうした彼の人間観は、啓蒙主義の思想家の人間観への

カウンターでもありました。理性を人間の本質と捉える思想は、人間の肉体やそれに伴う弱さのようなものを覆い隠す。そういった人間観やそれと関わるキリスト教理解との対抗関係の中で彼の思想は形成されていきました。私の研究はとりわけキルケゴールが批判したデンマークのヘーゲル主義との関係で彼の思想を読みとくものです。非常に狭い範囲の研究ではありますが、同時にこのような人間観の対立は歴史上様々な場面やキリスト教史の中にも見出せるものだと思います。

本研究所には、キリスト教を対象に、様々な時代、分野の研究者の先生方がおられます。ここで多くを学び、視座を広げ、今後の研究に活かしていきたいと思っております。よろしく願いいたします。

かすみ・てるゆき（客員研究員）

雑録

田中祐介

当研究所では今年度、全20回の大型企画として「アジアキリスト教講座」を開催することになった。この雑録を書く時点で春学期10回分のうち第7回（2024年6月18日開催）を迎えたところで、ありがたいことに各回とも盛会となった（荒天のために第4回が開催延期になったのは残念であった）。

本来、「アジアキリスト教講座」は2020年度にはじめて開催する予定であったが、新型コロナウイルスの影響により企画自体の中止を余儀なくされた。対面開催が困難な状況が続くなかで試行錯誤を重ね、2021年度は歴史および文化分野からなる全8回の無料オンライン講座「アジアキリスト教歴史文化講義シリーズ」として、規模を縮小して実施した。2022年度は神学分野が復帰した全10回の「アジアキリスト教講義シリーズ」として規模を拡大しながら、引き続き全面オンラインで実施した。どちらの年度も、Zoomを利用した同時双方向の形式を採った。

オンライン開催の利点は確かにあった。講義が始まる18時40分にネットワーク接続できる環境にありさえすれば、

聴講することができる。開催は常に平日（火曜日）であるから、日中の仕事や用事を終えたあとに白金校地まで赴くのが困難でも、オンライン開催だからこそ参加できたという受講生も少なからずいたと思われる。

一方でオンライン同時双方向の常として、話者以外は基本的に映像オフとなる。来場者の姿はおろか、お顔がなかなか分からない状況は寂しくもあり、外部からお招きした講師の先生にもご不便がないかと気を揉むことも多かった。実際に、次年度こそは対面で、というご希望を講師の先生から頂いたこともあった。

そのようなオンライン開催を経て、情勢の変化に鑑み、2023年度は「アジアキリスト教講義シリーズ」を対面開催するに至った。規模は前年度と同じ10回構成で、各回資料代500円を徴収して資料を印刷配布する。無料のオンライン講座であった2021年度、2022年度からは大きな変化であった。

平日の夜に白金校地に来られる方は限られることが予想された。また、オンライン参加の便利さを知った後となつては、ハイブリッドではない対面実施でどれほどの集客が見込めるかも不透明であった。慌ただしい企画運営となり、広報期間が短くなったこともあった。久しぶりとなる全面対面での開催には心配もつきまとった。

しかし蓋を開けてみれば、受講人数こそ最大でも20名弱ほどであったが、質疑応答では次々と手が上がり、時間が足りなくなるほどであった。オンライン開催の際には、主任や客員研究員が質問の口火を切ることも多かったが、講師と受講生の活発な意見交換の中では、もはやそのような役回りを果たす場面もなく、質問をそっと胸に秘めたまま終えることも普通になった。当該年度にハイブリッド形式をとらず、完全対面実施としたのは悩ましい決定であったが、お互い顔が見える環境での活発な意見交換は、対面会場に集約したからこそであったと言える。

2024年度、「アジアキリスト教講義シリーズ」は冒頭で述べた通り、全20回の「アジアキリスト教講座」として開催することになった。開催中止のやむなきに至った2020年度の構想が晴れて実現に至ったことになる。開催規模が倍

になったことに伴い、当研究所の多くの所員・研究員が講師を務めることになった。それはつまり、平素からの当研究所の活動成果をダイレクトに受講生に届ける機会になったことも意味する。市民に対する最新の研究の成果公開は、講師にとっても緊張の伴う、大切な機会である。

受講生の登録も昨年度より倍増し、各回 20 名以上の来場者に恵まれた。熱心な質疑応答でのやり取りは、一層白熱する学びの多い濃密な時間となった。暗中模索の時期とも言える全面オンライン実施の年度を思えば、運営に携わる立場として感慨深いものがある。残る春学期の開催回、そして秋学期の開催に際しても、実りの多い時間と空間を共有できる機会になるよう、心がけてゆきたい。

たなか・ゆうすけ (主任)

研究所活動 (2024 年 4 月～2024 年 6 月)

2024年度アジアキリスト教講義シリーズ (春学期)

(各回 火曜日 18:40-20:10)

第1回 5/7 「近現代韓国におけるキリスト教の明暗」

講師：徐正敏 所員

第2回 5/14 「宣教師が見た中国社会」

講師：渡辺祐子 協力研究員

第3回 5/21 「台湾キリスト教の多様性と特殊性」

講師：高井ヘラー由紀 協力研究員

第4回 5/28 「日本の国学とキリスト教受容」

(荒天につき延期、7月16日開催予定)

講師：嶋田彩司 所員

第5回 6/4 「永井隆「長崎の鐘」の功罪」

講師：篠崎美生子 所員

第6回 6/11 「遠藤周作とキリスト教」

講師：増田斎 協力研究員

第7回 6/18 「アジア神学の課題としての身体」

講師：植木献 所員

第8回 6/25 「近現代日本のユダヤ教理解」

講師：高木久夫 所員

新着図書

・『福音と世界』No. 4、新教出版社、2024。

・『福音と世界』No. 5、新教出版社、2024。

・『福音と世界』No. 6、新教出版社、2024。

・『閉塞日本を変えるキリスト教』

稲垣久和・水山裕文 共著、2023。(稲垣久和氏ご寄贈)

・『石は叫ぶ』キリスト教遺族の会 編者、2023。

・『キルケゴールのキリスト論』鹿住輝之 著、2024。

(鹿住輝之氏ご寄贈)

・『内村鑑三の聖書講解』小林孝吉 著、2020。

(小林孝吉氏ご寄贈)

・『内村鑑三 私は一基督者である』小林孝吉 著、2016。

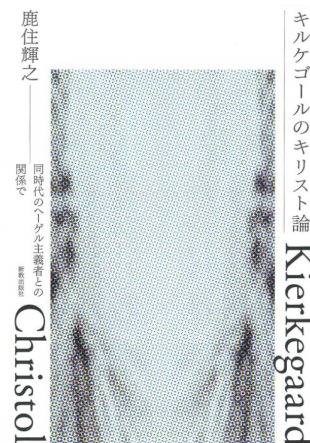
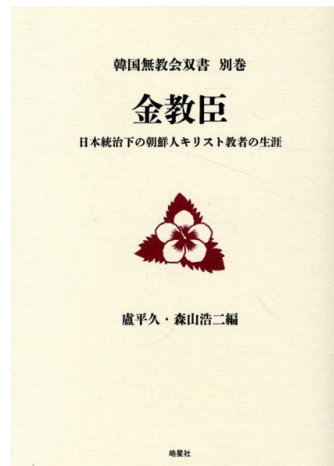
(小林孝吉氏ご寄贈)

・『韓国無教会双書』1～7巻 金教臣 著、2023。

・『韓国無教会双書』8～9巻 宋斗用 著、2023。

・『韓国無教会双書』別巻 盧平久・森山浩二編、2023。

(徐正敏氏ご寄贈)



MEMO



あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第94号

2024年7月10日 発行

明治学院大学キリスト教研究所

〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37

TEL:03-5421-5210 / FAX:03-5421-5214

Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩